

○日光の結構は陽明門の美でもあるが、西洋人は此の多くの杉の並木を日光の美に数へてゐる此の杉がなかつたら日光は殺風景極まるもので風景ばかりではない價格からいうても一本何十圓といふねうちである。

○年々の嵐に瓦や、お藥屋の塀などの立派な朱塗や金箔が一寸の破損に何百圓といふ損害をうける一昨年其のために一万圓の損害であつたが、修繕費の出途がない。こんな時には杉を伐つてするのである。

○日光の維持費の大部分は杉並木である、此の意味あり結構なる杉並木を造つたのは二百年前松平左工門大夫である。

○日光の建築の際に諸大名が競ふて色々の献上をしたが、松平侯は貧乏だつたのでそんな事が出来ず遂に杉の苗木を献上することにして何十万本といふ苗を道の両側に植えた。

○それが通行人のために抜かれたり、枯れたりするので、藩士若干人をつめさせ、なほ後から／＼植繼をして行たので、當時諸侯の嘲笑の的となつてゐたが、今はそれが日光の財源となつてゐる。松平侯は杉を以て自分任じたる人であるといつてよい。

○先生は一面又植林をなされた。よく昔の人に似て結構な事である。

○しかし之は先生の本領ではない。語に
一年の計は穀を植うるにあり

十年の計は木を植うるにあり

百年の計は人を教ふるにあり

とある通りに先生は人を教ふるを以て自ら任じたのである。

○其の感化を受けて澤山を碩學鴻儒が輩出したが全く先生の御精神によつてである。

○先刻村長さんからお話を承るご當村は自治が圓滿に行つて一村の話がよく纏るといふことであるが誠に結構である。纏らない時に先生を持出せば直に纏るさうである。

○私の學校では校訓も校歌も先生を中心としてゐる。何もない所に行つて空を事で生徒を導くは困る事である。御村などでは此無類の偉人を利用するのは結構な事では一層種々な方面に利用してより以上の効果を擧げてもらひたい。

○終に更に一言感じを述べると、先生は八面玲瓏一点の曇なき水晶の玉の如き人である。我々が先生の心を心とすれば先生が生きて來られるのである。

○若し我々がその心を体せなければ先生は此村をお逃げになつて隣村に行かれてしまふ。お祭をするだけではない。諸君の痛切な修養を希望するのである。

○三四年前藤田藤三郎といふ實業家があつて、種々な發明をしたが、其人が彼の水砂糖を造ることを發明した。

○水砂糖は始めに日本に出來ず支那から輸入してゐたので主に藥に使つてゐたから菓子屋に賣

らず藥屋に賣つてゐた。

○年々多額の輸入を防がうとして二三年かかつて工夫したが出来ないうで、流石の氏も退屈し一時中止することにあつた。

○丁度其の年の春尊徳神社に参拜して或宿屋に宿つてゐると隣室の客の話にあくをぬいできれいにすればすぐ固ると耳にしたので、氷砂糖の事ではないかと思つて、行つて見ると誰れも居なかつた。

之が氏を刺激してそれから三日目に遂に氷砂糖が出来たさうだ。之は例話であるが、純潔にしてきれいにすれば固る、中のものがきたなければ決して固まらない。

○一村一部落に於てもやかましい制裁だけでは駄目である、其の中の人個々の人が自己をきれいにすれば固るのである。百の梅園先生があつても、人の心が去つてしまへば纏らない、先生は隣村に逃げてしまふであらう。

○先生が逝かれて百三十年になるが、先生を昔の偉人としてはためである。本村から澤山を梅園先生を出すことによつて先生が始めて生きて來られるのである。即ち先生の生命を不朽にする手段である。

○とりどめのない思ひ出したままの話をして相すまぬ。(終)

◎死後の生命

大分縣立女子師範學校長 島田民治氏

本日梅園先生の祭で私如き最近本縣に参りました者が親しくお祭に列して一場の話をするこの出来るのは誠にうれしい事で御座います

私は關東なれば之れ迄東京にゐましたので此土地は不案内でしかし天文學や曆に興味を持つてゐましたから梅園先生を知つてゐました尙ほ旅行や登山がすきで十年の昔両子山に登つて一面を眺めて裾野の行儀のよい事に感服しましたが此の山の麓に梅園先生のお墓があるを聞きましてが其まゝ歸りました十年の今日又々此方に参ることが出来ました杵築に綾部先生あるを思ひ杵築に行くことがあるなら其時此方に参る考へであつたのに今回祭に來いと村長さんから言はれたので十年の望みを今日果たした譯です梅園先生が杵築に出来る時に跳足で山道を通られたと言ふので私も其山道を通つて見たいと思つたけれど今は通れないと言ふので人を雇つて少し道は異なるけれど山を越へて参りましたが先生の宅は山の八合目なれば宿さへあるまいと思つてゐたのに先生の御宅に泊ることを得この位うれしいことはない今朝天神様や御墓に詣り又先生の遺物を拜見したので思ひ置くことは更にありません

先生の死後已に百二十年の今日尙先生は生きてゐる人は死人でどうなるかと言ふことを考へた死は人の思ひものであるが達者な時は死と言ふ様なことは考へないが一度病になれば直に心配

する人は死が第一つらいつたのであるが人は常に此死と言ふことを考へて置かねばならない佛教では死後彌陀の淨土に行くと言ふが耶蘇は天國に行くと言ふてゐる死後男の魂は木霊に行き女の魂は臺所に行くとも言ふてゐる魂は残つゐるかどうかわからぬが青火を引いて飛ぶとも言ふてゐる私の聞いた通俗の話は次の様だ人が死ぬれば其の腐ると共に魂もなくなる如く考へる生物の死後は骨の様な礦物に變するが魂は消滅する生物の死後魂があるならば取つて置いて入れかへられる譯である人が夢を見て大阪に行けばそれは魂が大阪に行つたのである人に逢へば魂が其人に逢ふたのであると言ふてゐたが人は死後他の動物と同じ様に其の礦物に變じ魂もなくなると思つてゐたのだ私の教へた一人の女教員が大阪にあつて優良教員で大阪隨一と言はれて居た不幸な人で其人は放蕩をかやし家は貧しくあはれな人であつたが五月頃此人より手紙が來た病氣である熱が高い四十度位であるとのことだから私は肺病に罹つたと思ひ教員を止めようして保養をしようと言ふてやつた六月頃教員を止めたと言ふ通知があつた自分が見舞に行つた時は大分瘦せてゐた私の内は一人の女中を置いてあつたが性來鋭敏で泣く癖があつた或晩泣いてゐるので其故を問へば今夢を見たのに葬式があつたそれが先生の室に這入つて出てこないのであつた云ふてゐた其後大阪から前の女教員の死んだ報知があつたが其手紙によれば女中の夢を見た時刻に死んでゐるゝこでこの事を福眞博士に話したらうんな話は澤山あると言はれたが我々の其の死後如何になるか物質上より言へば皆腐つて何物も残らない人は少年青年老年と變化

して行き遂に死ぬるのだ故に自分の其を若くして置かねばならぬ故に子供を生んで若く／＼なり變つて行くのだ子供が出来れば自分は若くなつて残つてゐるのだからもう用はなくなる死んでもよいのだ自分の體は若くなつて後に残つてゐるのである佛教では親は子として子は孫として生れ變る即ち輪回である故に親は嚴重に子を監督する必要がある肉體は斯の如くであるが魂は如何であらふ人が死んだ後世の人に長らく覺えられてゐるのは其人の魂が残つてゐるつてゐる人の心や技倆などは靈魂の一部である世の中は人の靈魂の取遣である故に人の魂は人から人に入り替つて行くのである梅園先生は死なれても之を東京の人が知れば東京の人に在る譯である我々は如何なる人にも魂を別けることが出来るが廣さが違ふそれは大人物と小人物の差があるからである即廣く深く入るか否かによつて其人の差がつく世の中に大事蹟を残す人は魂を廣く深く長く残す譯である

魂を残すと言ふことは善行發明世の爲め等になることをすれば永く世の中に生くる譯である楠公二宮乃木伊藤等の偉人の魂は我國の有る限りは生きてゐるのである私は世の中に生きてゐるから長く生きたいが魂を残すことは出来ないから足跡でも残したい人物としては残せぬから何か仕事でもして置きたいと思つてゐる

梅園先生は人の魂を受け次ぐ外自分で魂を考へ出した方である世の中は後に生れて來る人が前の人より偉くならないと發達進歩せない譯になる又人は遺傳によつて事をなしてゐる之は幾代

かの祖先が傳へたのである子は親に似る孫は子に似る此の理に依り親が技術を鍊れば夫れが子に傳はる然し直ぐとは行かぬ祖先なり親なりが鍊つて置くと數代の後には之が傳るのである魂と言ふ力が傳はるのである此の力によりて物を考へることが出来る人は練習したものを傳へらるゝと云ふことがあるから段々偉くなること出来る又自分の魂も人に傳へることが出来る人から貰つたものと自分で考へ出したものごとを人に傳へて永く生ることが出来る

神に仕へる心持ち神に祈る心持について一言したい神は昔の偉人である

人が押し上げて神となつたのである物を頼む爲めのもではない故に神を拜する時は其神にあつた人の徳を慕ふべきものである頼むべきではない神の魂が永久に深く這いらぬと言ふことが第一の目的とすべきである

教育勅語も祖先の教へである神の魂を受ただけではまだ餘りよくない神以上にならなければ世の中は進歩せぬ此意味に於て此の村の人も梅園先生以上に偉くならなければならぬ我々には祖先より力を與へられて居るから其力によりて益々盛にならなければならぬ此會にしても梅園先生に似た人が出来る丈ではなく先生以上の人物が出来なくてはならぬ此村の人のみならず尚ほ廣く他町村の人に至るまで其様になりたいものだ

釋迦は初め印度に生れたが今は印度には居ない支那に移つてゐたが此處にも居ない今は只日本に來て生きてゐる日本では崇敬する人が多い故に釋迦は日本に生きてゐる譯である如何に偉人

があつても其他に其偉人にあやかる人物が出来なければ偉人の魂はない此意味に於て其偉人にあやかりたいと言ふ人の多くある様にだん／＼廣がる様にせなければならぬ自分は近江の小川村の中江藤樹先生の墓を訪ねた事がある墓に詣らんとして此村に行つて先生の墓のあるお寺にいつて尋ねたが寺の僧は一向とり合はない何故かと調べて見るご先生の墓があつても寺には何の利益も無い反つて迷惑であると言ふので此の通り人が尋ねても教へないのだ斯様な有様で藤樹先生の魂は今小川村にはなくならふとしてゐる何處か移らふとしてゐる

然るに梅園先生の魂は今此村に生きてゐるのは結構である今之を永く深く廣く傳へたいと思ふのである両子山は其昔盛に火山灰を降らして國東半島と言ふ裾野を作つてゐるゝして其噴出物たる土石が正しく積まれてゐるのは此の附近の涯等を見ても分る誠に立派な層になつて正しくある山は低いが噴出物が多い此の両子の麓に御生れになつた梅園先生も此の山によく似通ふたところがある即ち先生は比較的名の低いが遺物は誠に豊富である而して條理正しい大學者大徳行家である満場の諸君どうか何處までも先生を活して先生の御生地たる村として立派な人物が續々出て來る様に願ひます甚だ長いことを申して辭聴を煩しました

◎偉人を偲びて

大分盲啞學校長 森 清 克 氏

○先刻來有益なお話があつたが私はつまらぬ事であるが少しお話ししよう。梅園先生が質素で下々をよくあはれられた事は諸君のよく御承知の事である彼の久留島侯から招かれても種々の詩や歌を作りて辞退した事は乃木大將に似てゐる。○彼の三十三年の北清事變の時、部下が馬蹄銀をぬすんだ事があつたが其の罪を悔ひて休職を願ひ出て那須野原で百姓をしてゐたが人物經濟上惜しいからとて或人が會社の社長に推薦したが將軍は明後日まで考察させてくれといつていよいよ其日に

武士は黄金も玉も何かせん

命にかへて名こころ惜けれ

の一首を詠じてこゝはつた。○梅園先生は人々にあはれみを乞ふことを厭うて「梅園嘗て人に物を乞ひしことなし」といはれたが將軍もよくこのことをいはれて汝は決して如何に渴するも同情を求むるなといつてゐられた○昔は乞食といふものがあつた褌衣を着て物を乞うた近來は色々の方面に於て物を乞ふことがある或る新聞にも「山高にフロッグコートを着けて人の間に立ちよく物を乞ふ人に乞食の所作をして自己の虚榮心を満足せんとする」というてゐる名譽を得んが爲めに法律まで侵してゐるものもある。○先生や大將は定めし人の顔の皮の厚く足の皮の薄くなつてゐるのを歎かれるであらう○近來黨派をどり自分の主義政見等につき色々の騒動をしてゐるが其主義政見等はつまり國利民福に外ならぬ○如此偉大なる人物が當村に生れた

以上は梅園會によつて村民の心統一し萬事を處理して正論によつて事を處したならば他町村から笑はれる如き事はあるまいと思ふ。○乃木大將は辛抱して金をためて了れを人にめぐんだ一年の俸格が七千五百圓金鶏勳章年金が一千五百圓も受けてゐたから定めしかつてゐられるだらうと思ふが實際は麥飯で立てられ夫人と共に野菜や米麥をつくられて居た。○薨後残つてゐたのは僅の田地と僅の金であつた年々の収入は癘兵や戦病死者の遺族や其の他貧乏人道路改修公共團體などのために寄附されてゐたのである之もよく先生に似てゐる。○戦地で風呂をわかつた時でも將軍が湯の非常に熱いのを辛抱して風呂の側で洗はれた事があつたつまり下々を思ひやつてである。○開戦前次子保典氏が出征したいとて隊から一夜歸つて來た事があつたが將軍は「汝の身は汝の物で父の物ではない陛下のものである父が中将なるが故に願の叶ふだらうと思ふのは誤である」といつて聞かせて歸隊させた事がある。○將軍が愈出征する時に夫人に「三人の棺が揃つたらは葬儀をせよ」と言ひ残して出られた。○出征中は夫人に一片の手紙だに送らなかつた只保典氏戦死の時に單に「二百三高地に於て戦死す」との短かい手紙があつた○二子戦死の際新聞雜誌では靜子夫人は一滴の涙も出さないといつてゐた夫人はいつも心の中では泣いてゐられたしかし二人の兄弟も陛下のかうばに仕へたのだと思へば心も晴れて涙も止まると夫人がゐられた。○旅順攻圍中は「大將が二人の子を失ふたので氣が狂うて旅順は落ちないのだ、あれは氣狂將軍の妻だ」と嘲られ身をさらされるようにあつたが旅順が落ちたの

二十
で幾分か心が和らいだ。つまり將軍の心が夫人にうつり、二人の心が忠義ある御子さんにうつたものである

◎梅園祭に就きて

國東實科女學校長 河野甚吉氏

本日は御村の各位が此の廣き講堂に會し東洋の大偉人たる梅園先生の御例祭を行ふに當り此の席に列することの出来たのは誠に光榮であると同時に郡教育會の一員として講演せよと云ふことは身に餘る光榮であります私は西安岐村の者ですから同じ此の流れの水を飲んで成長したので先生の事柄によりて教を受けた一人で深い關係を持つて居ます私は唯今小學校に勤務してゐますので常に子供に向つて平口で話してゐるから今日も其の口調で話しますからおかしい事があつたら笑つて下さい又話す事で幾分でも役に立つ所はお取り下さい又不用の所は捨てて下さい本村が天下の偉人たる大先生のお徳を偲んでお祭りをなさる事は誠に結構でありますが此のお祭りを話したお祭りにして下さいと云ふ事に就いて話して見たい此のお祭りの日は老若男女心の洗濯をして其の垢を取つたなら應先生もお喜びかと思ひます又意味あるお祭りとなることでせう着物の洗濯については朝鮮人は川の水に浸して石でたたいて洗つてゐる又石鹼をつけて洗つたり西洋洗濯法をしたり其の方法も色々あります如く心の洗濯法も又様々あります唯今

吾日本國民は一日も安閑としてゐられる時ではない歐洲の大戦は如何にして何時結末がつくか何人も想像が出来ぬ此の未曾有の大戦も其の原因は各位國の嫉妬野心が基である殊に心に一物を藏する獨逸は一面世界を相手に戦つてゐる側ら平和の境には如何にして國力の充實を計るかに餘念がないさて平和後の戦争は支那が其の舞臺ではあるまいか唇齒の關係ある吾國は如何にして戦後の經營に當りますか國力の充實とか人材を造るとか國防を完備するとか仕事は澤山あるが國民皆が心の底から一致團結する事が第一だ國民一致の團結心の洗濯法が出来たら何事でも出来得る日本全國には二万余の町村があるが之の各町村が一致團結同一歩調で行つたら何事でも出来ない事はない故に心の洗濯は一家一村皆同一歩調でないと都合が悪い一致團結を形造る第一歩の洗濯は各人心の融合である言葉をかゆれば意志の疏通である今この意志の疏通から起つた昔廬を致しませう

ある村に一青年があつた親二人に子一人で可愛がられて育つた青年である所がどうしたものか二年たたない内に両親を失ふ不幸に出逢つた近所の人のお世話で嫁を貰つて日毎正直に働いてゐた月日のたつのは速いもので此の青年四十一の厄年がきた旅立ちをすればよいと云ふので参宮する事にした無事参拜もすんで大坂まで歸つて来て町見物をしてゐると或る店にキラ／＼と光るものがある其の前に立つて不思議や二十年前に死んだ親爺さんが居るので何もかもない買つて歸つて來たらうして二階の長持に入れある親孝行な人だから他出の時や他から歸つた時は二

借にかけ上つてお父さん唯今と挨拶するのが常であつた此の様子を見た嫁さんは不思議でたまらない或る日主人の留守を見計らつて長持の蓋を明けて見ることは如何に一人の女がかくしてある今迄唯の一度もやいた事のない嫁ももう黙つては居られない主人の歸宅を待ちかねて焼もちが始まつた主人は己れのお父さんだと云へば嫁さんは隠し女だといふ隣の尼寺の妙林さんがやつて来て仲裁する事になつた妙林さんは實物を見た上で二階に上り長持の蓋を開いて見るご一人の尼僧かゝるこれはと妙林さん下りて来て親爺さんでもなし又焼く程の隠し女でもない全く年老いた尼さんだ……。

之は鏡のなかつた國のお話でせう話は意志の疏通を欠いた爲め起つた争ひである主人が妻にかくしたのが抑もの誤りであつた次にこの世の中は他人同志の集りだから余り我を通しては宜しくない

ある村に一人の財産家があつた子供がない養子をするが誰も長居が出来ないとうとう四十七人まで貰ひかへた長く居つたものが三十日短きものは其の足で歸つて来る所が隣村に村一番の評判青年があつただん／＼人の勤めて養子に行く貰ふといふ事になつたさあ行つて見ると思ふたよりも小言は多く逆もやりきれぬ今日は出て行かうか明日は歸らふかと一日千秋の思ひで過してゐた時は秋の初めである養父の命令で障子を二枚町から買つて来て大工を雇ふて切りはめる事になつた柱の傾いた而かもねぢけた間に新しい障子が満足に建つ筈がない大工は一生懸命に

障子を切つたりゆがめたりしてとう／＼間にはめ込んだ之をうばで見てゐた若養子の青年は悟つたわかつたど手を拍つて新しい物は古いものに合はせねばならぬ自分が養父母の氣に入らないのは全く新來の自分が之れの家風に合はせぬからだ……それからと云ふものは親の機嫌をとる家風に合せる心を碎いた結果親子睦しく遂に此の財産家の相續人となつたこの事だ次に如何なる各説高論を聞いても實行の氣分が伴はなければ役に立たない聞いた値打は實行に俟たねばならぬ

私の壇那寺は小川の實際寺である私が子供上りの時に一晚か説教に詣つた事がある所が説教和尚さんの話に此迄連日連夜一週間のお話は腑に落ちたかき今日のお別れに一つごめめの話を致しませう或る村に夫婦ものがあつた子がないので若い内は何不足なく氣樂に暮して居たがさあ死際を考ゆると誠に心淋しいけれ共月日に關守なく額の皺と白髪の数が増す斗りである或る年の秋の祭りがやつて來た今年は豊年の事とて村内の大賑き隣近所家々では息子が歸れば嫁も来る孫の四五人も連れて來る誠に陽氣である賑かであるこれに比べて老夫婦の家は淋さの度は一倍だ常に變らぬ獻立で眠りに就いたお嬢さんは朝の仕度にかゝらふと臺所に這入るご不思議や一匹の白鼠が向の棚にすはつてゐるお爺さんはお嬢さんに呼び起されて二人で大悦び白鼠といふ福の神が此の家に居るからには吾々も決して心配するに及ばない老後は屹度仕合せ事があるに違ひないやれうれしやと眺めて居る内にチ、と泣いて毛振ひしたと思ふと今迄の白鼠はい

やらしい黒鼠となつてしまつた之れはとよく／＼檢べて見ればお嬢さんがしまつてあつた饅頭粉をかぶつて居つたのであつたあゝ何と云ふ馬鹿げた事であらふ人も心のどん底から洗濯し上げて染めぬいだものでなければ駄目である付け薬りはききめが少い人の話を聞いても表への聞きかたでは役にたたぬ……。

最後に此のお祭りを行ふにも先生の高德を追慕私淑すること共に諸名士の御講演により之を修養の機關とせられ益々活きたるお祭として頂きたいのであります

◎國民將來の覺悟

西國東郡田原村寶陀寺住職 池 永 禪 誠 氏

偕て今日は梅園祭に就て小野村長及宮本校長御両所より御沙汰でありましたから出席致したのは私の光榮とする所であります聊か梅園先生御徳の一端を述べてまして吾學術上に如何に貢獻しられたかを追想し頌徳せんと欲する微意に外ならのでありますそれに先達ちまして吾が太日本帝國現下の有様を述べて先生の道義的觀念を祖述せられしことを吾人は修養の一端とせんと欲するのであります

諸君御承知の通り今日日本帝國は僅か半世紀の間に世界に出ました世界は大凡日本の三百倍の土地がある日本は新領土を合しても尙三十分の一而して世界人口三十分の一である最近年世界國

際間の貿易が六百五十億圓との事である然るに日本は僅か十數億圓である左すれば五十分の一乃至六十分の一である世界の三十分の一の人口を以て六十分の一の商賣しかしてゐない今割合からいへば日本の商賣は二十二億圓になつて平均するのである茲に於て日本が世界人口の三十分の一たる五千万の國民が其の富に於ても文明の程度に於ても遙かに張大なる諸文明國に向つて競争せねばならぬので中々困難なところである恰も卵を以て石に向ふ如きである而して悲觀はせない假令鶏を殺すの力がなくとも智慧があれば牛を屠ることも虎を撃つことも出来るそれが今日文明の力である學問から生ずる力である其の學問の大部分は物質的文明即ち科學の力である此の科學の力と一方道義的觀念とを以て攻究したならば歐米先進國の如くなることが出来るのであるけれども一足飛びには出来ない協同一致不屈不撓の精神で進んだならば遂には英の如く米の如く富の力も人口も貿易も土地領土も智力も充實して競争することが出来るものと確信されます此の競争に如何にして勝つか是は國民が八時間働く所を十二時間労働するより穩衡はない大學にも(財を生ずるに大道あり之を生ずる者衆くして之を食ひ者寡く之を爲す者疾く之を用ひる者寡かなれば則ち財常に足る)と僅か一日に四時間宛の労働時間だけれども五千万の國民が四時間宛の仕事に仕越したならば非常な事になるのは理の當然である日本國民の現狀はつまり五十錢取つて一圓消費して居る有様である之を反對に一圓取つて五十錢費す様にしたならば必ず歐米先進國と競争する事が出来るのである畢竟勤勉にして規律ある協心戮力の國民

が勝を利するのである此の協力との原理は梅園先生の所謂道義的精神より結露するに外ならぬのであります

昔鎌倉の宏覺禪師は蒙古襲來の時即ち弘安四年の夏の頃と軍歌にあるが如く時に禪師は敵國降伏の願文を書かせられて其の終りに一首の和歌を詠せられた「末の世の末の末まで我國は萬の國に勝れたる國」と誠に然りである是はか互國民をして巨大妄想的國民性を挑發せしむるものと誤解してはならぬ實は禪師の精神は此の一首の歌の中に吾が國民的大抱負が躍如して居るのである

試に見よ吾人と足趾を反接する英國は豐太閣と同時代に女皇エリザベスがあつた英國の大帝國主義は此の時代を以て新紀元を作つた居る一五五八年七月ドレーキ、ホウキン等は西班牙の大艦隊を撃破して海上權の基を啓きました同年即ち我天正十六年四月は恰も秀吉が群雄を率ひて後陽成辛の鳳輦を聚樂邸に迎へ奉つた年である一五九二年吾文祿元年は征韓の將士が鷄林八道を蹂躪し一舉して京城を陥れた時であります若し吾國が英國同様の大抱負を以て居たならば成敗利鈍は必ずありもしませうが浦賀一發の砲聲に腰を抜かす迄には行かなかつたらふと思はれます、いや北は朝鮮滿洲より南は暹羅安南より南洋諸島はおろか太平洋乃至スマトラ海峽迄も必ず吾が民族の繁昌を見た事と考へます此の間英は外に向つて發展し吾は内に向つて收縮した内と外始めは毫厘の差に過ぎないが道に千里の遠きを致した譯であります想ひ起す三百年の昔

英吉利蜘蛛奴が西の端より東の方に向つてゑばをびゆう／＼出しまして濠洲加奈陀香港ニユーファウンドランドや印度迄も遂に餌張に巻きこりました北には露西亞蜘蛛奴が這ひ出してシベリヤ平原から曾つては支那領であつた浦鹽も巻きこりましたのみならず日本領で有つた樺太や北海道迄も巻きかけました所が東の方に三百年も眠つて居つた日本蜘蛛奴は牀ころ小さいが根性はなか／＼すばしこい目を醒して見るこ外國の蜘蛛奴はろれ／＼網に澤出な獲物が有つたオヤ是は大變だ小供は殖える餌は足りない歐羅巴の大將蜘蛛に相談を掛けた結果では大な物は捕るかよ畏りました蟬蛸蛤は捕りません蠅や蚊やアア位で結構ですこ東の方から西にお尻を向けましてゑばを張りました所が臺灣や朝鮮遼東半島がかかりました所で歐羅巴の中の獨逸グモと露西亞グモと佛蘭西グモとが大きな目をひき出してコラ日本グモよ体の小さい癖にろんな大蟬や大トンボを捕ると云ふ事があるか早く還せ戻せとふ／＼横取りに遼東半島は取り戻されまして日本グモは嗚呼残念な事をしたと齒を喰ひしはら腕をやくして臥薪嘗膽茲に十年一大屈辱を潑がなければあるべからずと氣も張り弓でもありました時これ來れり明治三十七年二月の頃日露の大戦役となりまして遂う／＼露西亞グモをやりつけました所が今迄好意を表して居りました歐羅巴のグモの仲間も少し嫉妬の念と恐怖の眼を以てにらむ様になりました

諸君吾が同胞は如何なる境遇を経來りしかを考へて御覽なさい世界の國際間に於て朝鮮を除く外皆な吾日本よりも張大なる國柄であるご始終畏縮して居つたのであります其の朝鮮さへも背

後に支那といふ大國が尻押をして居るので思ふ様に行かつた位です所が明治二十七八年役に於て海に陸に吾が忠勇なる將校士卒は一大戦勝の光榮を擔ふことにありました茲に於て吾が同胞は甫めて我が力の強いといふ事を自覺したのであります其後三十七八年戦役に於ても露西亞と干戈を交へたが鴨綠江の一戦迄は心配要心に要心して居りましたが戦つて見れば露西亞も思つたよりは案外で日本魂の向ふ所真に敵なしたと始めて自覺時代に入つたのであります今や歐洲の大戦乱は非常に擴大されて十七八ヶ國は戦乱の渦中に投せられて居ます露西亞は日本に好意を表し有ゆる手段を講じて日本をして後援者たらしめ軍用武器を始めとして食料に至る迄大々的註文を致して來たのであります日本も御機嫌をさられて見れば真更悪い方ではありません可及的の註文に應じて好意を表したのであります今迄は十七八億圓の負債を持た日本も此の度の戦乱にて九億圓近い正貨が這入つたのであります昨日までは大藏省の時計の音が借金々々と響いて居つたので今日では貯金々々と鳴つて居ります然り而して吾國は富の程度に於て二十幾億圓の富を増したのであります是は外ではありませぬ輸入杜絶と成つた爲めに科學の研究上に就きまして發明されたり俄かに諸外國より大註文が續々殖えた爲めであります乍併此の好景氣が將來永續するか否やは疑問であります此處吾國民は緊要一番すべき状態であることは識者の唱導する處であります翻つて何故又露國は安心して百二十万以上の陸兵を戦地に出し得たのであるか又英國は東洋方面の艦隊を獨逸の艦隊と交戦すべく毫も後顧の患ひなく引き上げ得たで

あるか是は日英同盟の力と日露協約の賜であります斯く述べ來りますと日本人自ら發見し世界列強は日本の武力を首肯したのであります乃ち大日本帝國の陸海軍の力によりて東洋方面の危險を鎮定すべく安心して日本に依頼し心易くも軍隊を思ふ方面に活動せしめ得るので吾國の使命は重且大と謂はねばなりません明治三十五年の日英同盟は徒らに叩頭的同盟ではありません思ふに三國干涉の結果大々的鉄槌を五千万同胞の頭上に一時にカチンとやられたので殘念ながら遼東半島は還付されたのであります其時に勝海舟翁は

「三國にふみはたかれや不二の山」と詠じました實に吾國民に彈力的大宣言を下したのと同様であります於是か國民は上下一致大努力をいたしました其後日本は彈力性を發揮して戦後の經營に従事すると同時に實力の養成に努めたのであります所が歐洲諸強國は焼餅をやき出し歐洲列國のみならず自ら日本に兄き分を氣取つて居られた米國迄が次第に日本に向つて焼餅を始めました而し實力には如何ともする事は出来ません彼の三十三年北清事變に際し背に腹の代へられぬ諸外國は日本の出兵を承認する計りではありませぬ英國の如き催告に次々に催告を以てしたではありませんか此の役に於て吾日本軍は世界列強環視の裡に於て二十七八年後の色上を致しました日本軍の精銳なる事は殆ど争ふ可からざる事實として列強に認められましたそれを利用せんと企てたのが實に英吉利であります斯くして日英同盟は成立したのであります然れば日本と英國との同盟は五歩々の踏み寄りでありまして叩頭的同盟ではありません實に日本は武

力に由つて同盟を得たの謂はねばなりません

斯く見來りますと日本は此時始めて世界一等國の班に列したのであります乍併敢て此の時を以て列強に伍したと思ふのは皮想の觀察に過ぎないのであります是非に淵源し來れる根柢が深いのであります其の根柢とは何であるかと云ふに即ち神儒佛の三道の教が基礎と成て居るのであります梅園先生は儒教主義に依つて盛に道義的思想を培養し大著述をせられ吾同胞に遺されたのであります此の主義の内容が横隘して國民性を形造たと云ふて然るべきと確信して居ります國民性の素地は神道で劔鏡璽の三種の神器を吾々の胸底に深く存して居るのであります儒教は智仁勇の三達徳を説き佛教は戒定慧三學を説き打つて一團となし茲に日本帝國主義と成つて顯はれたのであります此の三教の主義を精神的滋養とし大和民族の血液と變化し外に日進の科學百般の工藝的智識を擴め實地に應用し歐米先進國と競争場裏に立て商工の一大戦場に立ち向つたならば必ず勝利を得ることは疑ひ無きことと思ふのであります

今や吾が國は平時が二十五万人の陸兵でありますが戦時には二百万人の軍隊を編成することが出來きます吾々門外漢には分りませんけれども二年兵の制度を廢して早晚一年兵制となることかと思はれます國家に一旦緩急ある時には直ちに所屬師團に招集して僅かの間訓練しまして直ちに戦地に送ることを得る様にするのであらふと思ふのであります將來斯の如き形勢でありますれば國民が負擔する國の税金は目下の倍額を徴收せられることと覺悟をして居なくては日本帝

國の維持が出來ぬのであります今や北東の天地は海軍を十年計劃にて百億弗を支出するといふ事は諸君も新聞紙上で御承知の事と思ひます是が假想の敵國は果し何國を指すでありませう之に對抗すべく吾國も海軍の大擴張を要する事と思はれます若しも斯くの如く成つたことすれば何れの内閣諸公を問はず増税の止む無きに到る事は理の當然と私は思ふのであります御互國民の覺悟は如何でありませう孫子曰く「虞を以て不虞を待つものは勝つ」と吾々は獨逸が唯今勝利を得つくある事の偶然に非ざる事を深く感ずるものであります希くは滿場の諸君梅園先生の道義的精神を深く心に銘し宏覺禪師の詠せられた「末の世の末の末まで吾國は萬の國に勝れたる國」で吾か日本國民は帝國主義を奉し皇室を中心として忠勤を抽きんで國民的自負心と國民的自尊心とを益々増大し益々向上發展せしめ四六時中之を商工業に之を農業に殖林に不斷に應用したならば遂には歐米先進國の如き域に達し尙ほ凌駕し得る迄に至るであらふと思ふのであります

(寄稿)

◎三浦梅園先生著『五月雨抄』に就きて

第七高等學校教授 武藤長平氏

梅園先生の『五月雨抄』は天明四年の序文であるから先生が安永七年八月十三日より十月十三日まで長崎に遊ばれた後の著述で彼の『歸山錄』(長崎より歸宅後間もなく執筆せられたもの

であらう)と共に先生が長崎へ見聞を廣めに行かれた結果出来たものであらう。

『歸山錄』の中には長崎で吉雄耕牛、松村翠厓二人と締交して天文地學に關する西洋の學說を聞き、天象圖、寒暖計、望遠鏡、地球儀、地球儀、羅針盤、和蘭陀文字等を見て大に新智識を得られたのみか禁書醫藥地理風俗習慣等に關しても相應な智識を得て歸られた記念の雜考が隨筆的に書かれて居る。

この隨筆が六年の日月を経てやゝ組織的に書き上げられた西洋の宗教及び文化東漸に關する著述が此の『五月雨抄』である。『歸山錄』と『五月雨抄』とは無論關係はある。前者は長崎留學の報告書であつて後者は先生の切支丹觀である。

先生は當時の儒者中では進歩主義の人で其學說の獨特創見に富んで居たことはいふまでもないが宗教其者に關しては儒者の見地を離れられなかつたと思ふ。遠西の文物や科學は飽く迄研究すべきものであることを認めて居られたやうであるが切支丹の害毒は實に恐るべきものだと思ひて居られた。

『五月雨抄』の序文に

西洋の教は今世にたえ侍れども術をさしはさみ人をたふらかす類はまゝ世に開き侍るみな其故知にならふなり。むかしの跡しり侍らばいかでかゝる淺ましき計に落ち入るべき、われ聞く西洋の人のひとの國をさるとするや干戈をうごかすをつたなしとすれば先づ金銀穀帛を以て寡

弱をたすけ貧弱をたすけ貧窮をにぎはし醫藥を以て疾病をすくひ奇巧を以て人の耳目をまどはし、終に天主三世の説を以て人の心をうごかし君にも親にもかへさるものとおもひこませ人心の己にうつるをみて、兵を以てこれに従ふれば一擧してその功を收むとかや。

といつて切支丹の害毒を説き、又本文の上巻にも西洋の諸國は海内を一視して萬里を遠しとせず、己が屬國として交易の利をむさばる。人の國を奪はんとすれば、先づ利を以て人の心をうつす。我國耶蘇の一乱も彼この術を用ひたり。

此等の説は恐くば先生が長崎游行の際其地の學者などから聞込んで來られた切支丹諸國侵略主義の恐るべきを祖述されたものでなからふか。現に『五月雨抄』上巻末に吉雄耕牛より聞いたといつて西洋諸國のうち阿蘭陀のみ入津赦免は諸國動靜治乱を偵報すべきによつて交易をゆるされけるよしなり。さるほどに本職は我國のものなりと和蘭貿易のことを斷定して居るから問題こゝ違へ先生所論の出處は大概推定せらるゝてはなからふか。

又た大友宗麟が鉄砲二挺を享祿三年豊後府内に來りたる南蠻船より得たる事實をば自國の史料典籍によりて論斷することなく、却つて『長崎縁記』から論及して居らるゝことや『長崎夜話草』によりて長崎開港のことを論ずるなど、益々此の書が長崎土産であることを明にする。

『五月雨抄』上下二冊たる小冊子であるけれども比較的整理された者で天地の有様より全世界の大勢に及び西洋諸國の優勢であつて其領土南海諸島に至ることを略説し亞細亞に儒佛二教ある

如く歐羅巴に耶蘇教あることと回朔に回々教あることを説明し明代に支那に來たかの利瑪竇や
龐迪我的に關して文明東漸の由來を説きそれから唐本檢閱と禁書三十四種の書目を擧げ安
土城下で説教した由「西教史」に書いてあるべし、オルガンタン師（『五月雨抄』にはウル
ガンパテレンと書いてある）傳道の情態よりセント、フランシス、ザウイール上人（全書には
フランシスサベウスと書いてある）の布教に及び、織田信長、小西行長、石田三成等武將
の信仰問題に論及し當時切支丹に歸依して基督教を得た邦人ハビヤン惠俊、エウスマウ安左工
門シユモン善五郎等のことを述べられやがて天草の大亂に就きてかなり詳しく評論し徳川幕
府の切支丹取締方針を説き、それより遠西文物の東漸の大勢に及び其序文中に見ゆる

有徳院殿の御時、司天監より天文推歩の爲に願出さるに噂名目ゆるされ、西洋の書もひもど
きはじめ、天文地理草木礦物等の類は翻して梓にちりばむる世となりぬ。神祖のあつくいま
しめ給ひしも、有廟の禁書をゆるし給ひしも、一張一弛の道にしてともに其澤を蒙る事に待る。
といふ意味で書いてあつて決して遠西文化を排斥しない方針で居らるゝやうであるが、切支丹
の教義には飽迄反對せられて社會風教の爲には儒教の教義に基き仁義の道を徹底せしめねばな
らぬことを痛論して居らるゝのは先生の宗教觀を研究する人の注意すべきことと思ふ。

（五月二十九日稿）

◎電燈の話

大分縣立工業徒弟學校長 高木秀太郎氏

不出世ノ鴻儒三浦梅園先生ノ御懿徳ヲ欽慕シ其御恩徳ヲ記憶シ並セテ先生ノ御遺澤ニ浴シ永久
ニ其偉大ナル感化ヲ得ントノ目的ヲ以テ先生御易實ノ日ヲ以テ例年梅園祭ヲ御執行ニ相成リ同
時ニ頌徳講演會ヲ御開催ニ相成ルコトハ誠ニ今代ノ美事ニシテ其教化ノ及フ處蓋シ測ルベカラ
ザルモノアル可キヲ信ズルノデアリマス此絶好ナル機會ニ於テ不肖ニモ出席シテ何か話セトノ
御委囑ヲ受ケマシタノハ不肖ノ實ニ光榮トスル處デアリマシテ早速御受ケヲ致シ罷リ出ツベキ
本意デアリマスガ折惡シク丁度宮崎地方ニ出張致シテ居リマシテ其意ヲ果ス事ガ出来ズ此光榮
ヲ空シク致シマシタコトハ返ス々々モ遺憾千萬ナ次第デアリマス併シセメテ講演ノ草稿デモ寄
セヨトノ事デアリマシタカラ詰ラメナガラ右ノ題目ニヨリ極メテ通俗的ニ一場ノ御話ヲ試ミシ
ト欲スルノデアリマス題ハ物質科學的デ或ハ乾燥無味殊ニ言ヒ表ハシガ甚下手デアリマスカラ
御分リニクキ点多々アリマセウド思ヒマス又カカル題ハ如何カトモ思ヒマシタガ梅園先生ハ
既ニ百二十余年ノ昔世ハ滔々トシテ盧學ニ走り物質ノ學問ナドハトント顧ミラズ偶々天文學
トカ物理學等ヲ研究スルモノガアレバキリストダンノ魔法デモ使フモノトシテ排斥セラレ幕府
カラハ御トガメヲ受クルト云フ様ナ時代ニ當リテ一人超然萬難ヲ排シテ物質ノ學問ヲ研究セラ
レタル御方デアアルコトヲ承ツテ居レバ此題モアナガチ先生ニ關係ノナイ突飛ナ題デモナカラウ

カト存マズ否寧ロ深キ關係ノアルモノト信マズ殊ニ又九州地方ハ水力ガ非常ニ豊富デ從ヒテ電力ガ又非常ニ豊富デアラカドシテ田舎ヘ行ツテモ盛ンニ電燈ヲ点シテ居ルカラ電燈ニ就テ皆ノ人ガ心得テオク事ハ又不必要デハナカラウカトモ思ヒマシタカラ殊更此題目ヲ引張り出シマシタ次第デアリマス併シ非常ニ陳腐ナ題目デアラカラ皆様モウ能ク御承知ノ事トモ存マズガ又御存知ノナイ方モアリマシテ多少ナリトモ御參考トナリマシタナラバ不肖ノ幸ニ過マセン今一ツ御斷リヲシテ置カナケレバナラヌハ極メテ通俗的ニ誰レニデモ分ル様ニト思ヒマシタカラ理論ハ出來ル丈省キマシタカラ何ンダユンナ馬鹿々々シイ事ハ誰レデモ分ツテ居ルヲヤナイカト云フ御叱リヲ蒙ル様ナ事モアラウト思ヒマスガ私ハ成ル可ク廣ク一般ニ知ツテ戴キタイ考カラ申上グルノ御座リマスカドウカ惡シカラズ御酌ミ取リテ願ヒ度イノデアリマスサテ光ハ一体如何シテ出ルカト云ヘバ物体ノ分子ガ非常ニ急劇ナル振動ヲナシ之レガ中間ノ或物質「エーテル」ト申シマスニヨリテ傳ヘラル、ノデアル故ニ光ヲ出スニハ物体ノ分子ヲ振動サスル事ガ必要デアラダカラ物体ハ分子ヲ振動セセサヘスレバ光ガ出ルソレニハ物体ヲ熱スルコトニヨリテ振動サスルコトモアルシ又他ノ方法ニヨリテ振動サスルコトモアル「一物体ヲ熱スルト其分子ハ振動シ温度ガ高クナレバ益々振動ガ急劇トナルノデアル」即チ今日光ヲ發スルモノハ大抵熱ヲ持ツテ居ル即チ鉄デモ之ヲ熱スルト最初ハ唯黒クテ少シモ光ヲ出サナイガ段々温度ガ高クナルト振動ガ急劇トナリ次第ニ赤豆色ニナリ夫レカラ益々温度ガ高クナルト之ニ黄

色ガ混リ青色ガ混リ所謂七色ガ皆出デ來テ遂ニ千七百百度位ニナレバ白熾トナリ太陽ノ光ト同様ナ色ノ光トナルノデアル即チ温度ガ高クナリ從ヒテ振動ガ急劇トナルト殆ンド太陽ノ光ト同様ナ色ノ光トナリ明ルクナルモノデアル併シ前ニモ云ツタ通り物体ハ分子ヲ振動セセサヘスレバ光ハ出ルカラアナガチ熱ニ依賴セヌデモヨイ即チ熱ニヨラズシテ光ヲ出スモノモアル螢ノ光ハ是レデアル今電燈ノ話ヲスルノニ熱ニヨリテ光ヲ出ス電燈ト熱ニヨラズシテ光ヲ出ス電燈ノ二類ニ分ケテ話ヲナシテ電燈ノ進歩ト云フノハ如何ナル處ニ着眼スルノデアルカト云フ事ヲ話シテ見タイト思ヒマス。

先ヅ最初ニ熱ニヨリテ光ヲ出ス電燈ニ就キ話サウト思フ即チ其電燈ハ通例皆家々デ点火シテキル電燈即チ白熱燈デアリマス此電燈モ今ハ大變色ノ良イ太陽ノ光色ニ能ク似テ居ル心持ノ良イ電燈デアリマスガ始カラ斯様デハナカッタノデアル此電燈ハ彼ノ有名ナル米國ノ「トマスエヤソン氏」ガ發明シタモノデアツテ今ノ硝子電球ノ様ナ球ノ内ニ細イ白金ノ針金ヲ入レテ之ニ電氣ヲ通アタモノデアリマス電氣ガ此細キ針金ノ内ヲ通ル時ニ此針金ガ電氣ヲ通スマイトスルノチ（之ヲ電氣抵抗ト云フ）無理ニ通りテ其處ニ熱ガ出來テ其白金ガ熱セラレ光ガ出ルノデアアルソシテ其抵抗ガ大キクナレバナルホド熱ガ澤山出來テ從テ光モ明ルクナルト云フ譯デアアル其抵抗ガ大キクスルニハ成ル可ク針金ヲ細クスルノデアアル斯様ナ譯デ白熱燈ガ点火ルノテ「エヤソン氏」ガ最初拵ヘタモノガ是デアル併シ是ハ白金ノ價ガ非常ニ高イカラ到底一般ニハ用ヒラレ

マソレデ同氏ハ炭ノ織條ヲ以テ之ニ代ヘタ其炭ノ織條ハ最初ハ竹ヲ製シテ即チ竹ヲ細ク削ツテ之ヲ木炭ヲ燒ク様ニ蒸シ燒キニシテ製シタ而シテ其竹ガ我國京都ノ附近八幡村(男山八幡宮ノアル地)ノ竹ガ最モ良イト云フノデ之ヲ用ヰタモノデアル最初ノ電燈ト我日本ノ竹ハ實ニ不思議ナ關係ガアル所ガ之ヲ製スルニハ随分手間モカ、ルシ又一様ニ削ルニハ中々困難デアルカラ其後綿カラ此炭ノ織條ガ作ラレル様ニナツタ即チ脱脂綿鹽化亞鉛ノ溶液ニ溶シテドロ／＼ノ餡ノ様ナモノトナシ之ヲ筒ノ中ニ入レ底ニアル細キ孔ヲ通シテ押シ出シシテ素麵ノ様ナモノトナシテ之ヲ『アルコール』ノ中ニ落シ込ムト固マル是ヲ適當ノ長サニ切り型ノ中ニ入レテ密封シ蒸燒キニシテ作ル様ニナツタ前ノ竹ノ炭ノ織條デモ綿ノ炭ノ織條デモ之ヲ硝子球ノ内ニ裝置シテ其球内ノ空氣ヲ抜キ取ツタモノデアアル空氣ヲ抜キ去ルノハ炭ガ熱セラル、ト中デ燃エルカラデアアル此電燈ノ光ヲ放ツトキノ温度ハ千八百度位ノモノデアアル併シ此電燈割合ニ電力多ク要ル即チ一定ノ明ルサノ光ヲ出スノニ電力ガ割合ニ餘計ニ要ルカラ不經濟デアアルトコロガ物ヲ熱シテ光ヲ出サセルノニ温度ト明ルサトノ間ニ次ノ様ナ關係ガアル即チ温度チ少シ高ムルト其温度ノ高マツタ割合ヨリハ多ク明ルクナルソレダカラ電燈デモ成ルベク織條チ熱スルシ温度チ高クスルト其割合ヨリハヨリ以上ニ明ルクナルモノデアアルソレダカラ成ル可ク高キ温度デ点火スルト明ルサノ割合ニハ電力ガ要ラズ其經濟的ニナルモノデアアル即チ高温度デ点火スルト同ク一燭光(光ノ明ルサヲ表ハス言葉デ普通ノ家々デ点火シテ居ル電燈ハ十燭光カラ十六燭光デアアル五

分心ノランプハ約五燭光デアアル)ニ要ル電力ガ少クテヨイト云フ様ナ譯ニナルソレダカラ炭素ノ織條デモモット高温度ニ熱シテ点火スレバ割合ニ電力ヲ要セズシテ經濟デアアルケレドモ炭素ノ織條ガ其空中デ電氣デ熱セラルルト其表面ヨリ炭ノ粉ガ四方ニ飛散シテ織條ハ次第々々ニ減ツテ細クナリ遂ニ切れル又切れヌニシテモ硝子球ノ内面ニ其粉ガ附着シテ球ガ薄黒クナリテ電燈ガ暗クナルソウシテ此現象ハ温度ガ高ケレバ高イホド劇シクナリテ直グニ電燈ガ役ニ立タヌ様ニナリ電燈ノ壽命ガ短クナルカラユミニ温度チ高メルコトガ出来ヌ夫レ故ニ炭素線ノ電燈ハ不經濟デアアルソコデ其織條ガ金屬デアレバ余程斯云フ事ガナクナルカラ金屬ノ織條ナラハ都合ガヨイガ併シ金屬ノ織條デモ高温度ニ熱シテ熔ケテ仕舞フ様ナモノデハ役ニ立タヌカラ電氣抵抗ガ大キクシテ電氣デ高温度ニ熱シテモ熔ケナイ様ナ金屬デナケレバナラヌ斯ウ云フモノデ初メテ出来タモノガ『オスミウム』電燈デアアル此『オスミウム』ト云フ金屬ノ熔ケル温度ハ二千四百度デ白金ヨリ三百度モ高イ斯様ナ『オスミウム』ノ細キ針金チ炭素ノ織條ニ代ヘタモノガ『オスミウム』電燈デ此電燈ハ高温度デ点火スルコトガ出来ルカラ前ニ述ヘタ温度ト明ルサノ關係ヨリ約半分ノ電力デ同ア明ルサトナリ非常ニ經濟デアアル併シ此針金ハ非常ニ脆弱デアツタリソノ外種々ノ欠点カラ余リ廣ク使ハレナイ其次ニ金屬電燈ガ出テ来タモノガタングラム電燈デ『オムミウム』ノ代リニタングラト云フ金屬ノ細キ針金チ用ヒタモノデアツテ『オスミウム』電燈ト同様電力ハ割合ニ要ラヌガ産額ガ少イ爲メニ價ガ高イシ又其外色々不都合ノアル点カ